

シェイクスピア研究の手法

—日本シェイクスピア協会の研究発表より—

小林 康 男

1. はじめに

シェイクスピア研究の手法を知る方法は、様々である。国際シェイクスピア大会（今年は第8回国際シェイクスピア大会が2006年7月16日から7月23日までオーストラリアのブリスベンで開催された）の研究発表の分析、同じくセミナーの分析、同じくパネルセッションの分析等々である。あるいは日本シェイクスピア協会の研究発表やセミナーの分析等々である。そこでこの研究ノートでは過去10年間の日本シェイクスピア協会の研究発表を分析することにより、その研究手法の一端を提示したい。日本のシェイクスピア研究の手法を知ることが、今後の研究動向を知る上でも有意義であると思われる。過去10年間とは1996～2005の間である。

2. 1 日本シェイクスピア協会の研究発表の分類（過去10年間）

日本シェイクスピア協会の研究発表から過去10年間にどのような研究発表が行われたかを分析する。分析の方法は資料1（1996年の研究発表16についての分析）をご覧いただきたい。

資料1

年度		研究内容	研究方法分類	作品名	作者
1996	1	★作品の人物研究	キャラクター研究	『尺には尺を』	シェイクスピア
1996	2	★作品を当時のプロテスタントの結婚観や教会法を基に研究	歴史的研究	『尺には尺を』	シェイクスピア

1996	3	★シェイクスピアの作品上演論研究	上演研究	『じゃじゃ馬ならし』	シェイクスピア
1996	4	★シェイクスピア作品の上演に関連した人物論研究	上演研究+キャラクター研究	『リチャード3世』	シェイクスピア
1996	5	★キーワードによる作品研究	言語的研究	『間違いの喜劇』	シェイクスピア
1996	6	★当時の女性作家の文筆意義研究	歴史的研究	『エドワード二世の歴史』	エリザベス・ケアリ
1996	7	★作品の機知のやりとりに焦点を当てた研究	言語的研究	『空騒ぎ』	シェイクスピア
1996	8	★恋愛喜劇のプロトタイプ研究	原型研究	『ヴェローナの二紳士』	シェイクスピア
1996	9	★当時のサリカ法を基にした作品研究	歴史的研究	『ヘンリー五世』	シェイクスピア
1996	10	★シェイクスピア作品に出てくる語 'slave' を手がかりに論じている	歴史的研究	シェイクスピア全作品	シェイクスピア
1996	11	★人物に視点を当てた作品研究	キャラクター研究	『あらし』	シェイクスピア
1996	12	★マーロウの古代ローマ詩人作品の翻訳術研究	翻訳術研究	『ダイドウ』	クリストファ・マーロウ
1996	13	★言葉のレトリックに焦点を当てた作品研究	レトリック研究	『ルークリース』	シェイクスピア
1996	14	★新版の問題点研究	その他	Annals of English Drama 975-1700 (第三版)	S. S. Wagonheim 改訂
1996	15	★エリザベス朝の植物誌を手がかりとした作品研究	歴史的研究	『ハムレット』	シェイクスピア
1996	16	★登場人物の演劇研究	上演研究	『ハムレット』	シェイクスピア

研究内容、研究方法分類、作品名、作者を一覧表にした。ここで研究内容と研究方法分類をどのように行ったかを記しておく。研究発表にはそれぞれ400字程度の要約が、プログラム資料に掲載されている。そこでプログラム資料の要約を読み、おおよその研究内容を理解し、その研究方法を一覧表に記載した。ここに一例として1996年、立命館大学衣笠キャンパスで発表された樋口康夫氏の研究発表の要約を引用しておく。

オフィーリアの植物から見た— Hamlet — 熊本大学助教授 樋口康夫

今回の発表では、オフィーリアに関わる植物、取り分け4幕5場の有名な彼女の花々の分配のシーンと、ガートルードによる4幕7場の彼女の死について描写された部分に見られる植物を選び、Henry Lyte, John Gerard, John Parkinson 等による当時の植物誌 (Herbal) を参考にし、再度吟味してみる。再度というのも、この植物とシェイクスピアの作品との関係については、19世紀末から今世紀の初頭までは盛んに論議されてきたからであり、蛇足にも思えるが、Harold Jenkins のアーデン版のテキストや、オックスフォード版のそれを見ても未だ判然としない箇所も多々あるようで、今回再び取り上げてみる事とした。手順としては、先ず、上で触れた植物誌に基づいて、花期、生息環境などを詳細に調べた後に、そこで得られた知見を手がかりにこの劇の解釈を試みる予定である。

上述の内容を読むと、当時の植物誌を吟味してこの劇を解釈することが分かる。そこでこのような研究方法を歴史的研究に分類する。

2. 2 日本シェイクスピア協会の研究発表の分類から読み取れること (過去10年間)

日本シェイクスピア協会での1996年～2005年(10年間)の研究発表は140あり、その内シェイクスピア作品に関する研究発表が86である。残り54の発表はシェイクスピア以外の作家やシェイクスピアと共同作業をした作家、その他の研究発表である。取り上げられた作家を列挙する。

ウィリアム・シェイクスピア 86回、作者不詳 3回、志賀直哉 2回、クリストファー・マーロー 2回、ジョージ・ピール 2回、トーマス・ミドルトン 2回、

トマス・キッド 2 回、トマス・ノートン 2 回、トマス・サックビル 2 回、ウィリアム・ローリー 2 回、フィリップ・シドニー 2 回、ジェイムズ・シャーリー 2 回、ジョン・ウエブスター、ジョン・デニス、ベン・ジョンソン、ヘンリー・チェトル、アフラ・ベイン、ジョン・バンクcroft、シ rilル・ターナー、エリザベス・ケアリ、ロバート・ウィルソン、オウィディウス、トマス・ヘイウッド、フィリップ・マッシンジャー、ジョン・フレッチャー、トマス・デッカー、トマス・ロッジ、ロバート・ヤリントン、キャンヴェン・ディッシュ、ジョン・マーストン、ジョン・キーツ、チャールズ・ラム、ハロルド・ブルーム、Francis Pilkington（音楽家）、Washington Irving、Nathaniel Hawthorne、Delia Bacon、Henry James 等々。

ここではシェイクスピア作品だけに焦点を絞り、ジャンル別の研究発表の回数を記す。研究発表で取り上げられた作品が、例えば4作品(『ペリクリーズ』『シンベリン』『冬物語』『あらし])であれば、各作品の研究発表の回数が1回とこのようにカウントした。

2.2.a. 喜劇の場合

喜劇(問題劇6回を含む)は31回で、その内訳は『十二夜』5回、『尺には尺を』5回、『恋の骨折り損』3回、『間違いの喜劇』2回、『夏の夜の夢』2回、『ベニスの商人』2回、『お気に召すまま』2回、『空騒ぎ』1回、『ウィンザーの陽気な女房たち』1回、『ヴェローナの二紳士』1回、『じゃじゃ馬ならし』1回、『終わりよければすべてよし』1回となっている。

2.2.b. 詩劇と詩の場合

詩劇は4回で、詩は2回取り上げられている。その内訳は『ヴィーナスとアドゥニス』2回、『ルークリース』2回、『ソネット』1回、『愛人の嘆』1回となっている。

2.2.c. 悲劇の場合

悲劇32回の内訳は『ロミオとジュリエット』9回、『ハムレット』8回、『タイタス・アンドロニカス』4回、『リア王』4回、『マクベス』3回、『オセロウ』2回、『コリオレイナス』1回、『アントニーとクレオパトラ』1回となっている。

2.2.d. ロマンズ劇の場合

ロマンズ劇21回の内訳は『冬物語』9回、『ペリクリーズ』7回、『テンペスト』4回、『シンベリン』1回となっている。

2.2.e. 歴史劇の場合

歴史劇は18回で、その内訳は『ヘンリー五世』4回、『リチャード三世』3回、『リチャード二世』2回、『ヘンリー四世一部』2回、『ヘンリー四世二部』2回、『ジョン王』2回、『ヘンリー八世』1回、『ヘンリー六世・第一部』1回、『ヘンリー六世・第三部』1回となっている。

2.2.f. シェイクスピア作品以外の場合

シェイクスピア作品以外の主な作品を挙げると、『ゴードッグ』2回、『フェヴァシャムのアーデン』2回、『スペインの悲劇』2回、『エドワード三世』1回、『エドワード二世の歴史』1回、『ジョン王の乱世』1回、『姉妹たち』1回、『田舎大尉』1回、『アルカディア』1回、『アストロフィルとステラ』1回、『シェイクスピア物語』1回、『シェイクスピア悲劇論』1回、『アントニオの復讐』1回、『復讐者の悲劇』1回、『ダイドウ』1回、『タンバレン王』1回、『ニュー・アーケイディア』論1回、『パリスの審判』1回、『ローマの俳優』1回、『強制された結婚』1回、『好色な王子』1回、『オランダ人の求婚者』1回、『田舎女房』1回、『二人の血縁の貴公子』1回、『優しさで殺された女』1回、『美しき女たちへの戒め』1回、『二つの嘆かわしき悲劇』1回、『変身物語』1回

等々である。

2.2.g. シェイクスピア作品数と研究発表数の関係

シェイクスピア作品は史劇 10、喜劇 12、悲劇 11、ロマンス劇 4 と分類できるが、上述の研究発表回数と作品数を表にしてみる。

史劇 10	喜劇 12	悲劇 11	ロマンス劇 4
研究発表 18	研究発表 31	研究発表 32	研究発表 21

この表から分かることは、史劇、喜劇そして悲劇の作品数に対して、ロマンス劇の作品数が少ない割には、その作品数に対して研究発表数が断然多いことが分かる。『冬物語』9回は、『ロミオとジュリエット』9回と同数で、『ハムレット』の8回を抑えて一番多い。『ペリクリーズ』7回は、研究発表数で3番目に多く、ロマンス劇がこれほど多く取り上げられていることに驚く。

2.3. シェイクスピア作品関係の研究手法

シェイクスピア作品関係の研究発表は86回である。ではその研究手法はどのようなものか、一覧表にして分析することにする。前掲資料1を全ての研究発表に対して行ったが、資料2の一覧表には、シェイクスピア作品の研究発表だけに限定した。項目も研究分類、作品名、作品分類だけとした。

資料2

1	演劇意識研究	『アントニーとクレオパトラ』	悲劇
2	演劇的意味研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
3	ガートルード姦通説研究	『ハムレット』	悲劇
4	語り研究	『マクベス』	悲劇
5	語り研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
6	喜劇研究	『恋の骨折り損』	喜劇

7	キャラクター研究	『ベニスの商人』	喜劇
8	キャラクター研究	『ハムレット』	悲劇
9	キャラクター研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
10	キャラクター研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
11	キャラクター研究	『尺には尺を』	問題劇
12	キャラクター研究	『ヘンリー八世』	歴史劇
13	キャラクター研究	『テンペスト』	ロマンス劇
14	キャラクター研究	『冬物語』	ロマンス劇
15	キャラクター研究+歴史的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
16	キャラクター比較研究	『ヘンリー六世・第一部』	歴史劇
17	形態隠喩研究	『オセロウ』 『コリオレイナス』	悲劇 ロマンス劇
18	原型研究	『ヴェローナの二紳士』	喜劇
19	原型研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
20	言語的研究	『ウィンザーの陽気な女房たち』	喜劇
21	言語的研究	『間違いの喜劇』	喜劇
22	言語的研究	『間違いの喜劇』	喜劇
23	言語的研究	『空騒ぎ』	喜劇
24	言語的研究	『リア王』	悲劇
25	言語的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
26	言語的研究	『ロミオとジュリエット』 『夏の夜の夢』	悲劇 喜劇
27	言語的研究	『ヘンリー五世』	歴史劇
28	言語的研究+異性装研究	『お気に召すまま』	喜劇
29	コミュニケーション研究	『十二夜』	喜劇
30	作家研究	Jonson の Shakespeare 観	
31	サリカ法の象徴研究	『リチャード二世』 『ヘンリー四世一部』 『ヘンリー四世二部』 『ヘンリー五世』	歴史劇

32	時間研究	『冬物語』	ロマンス劇
33	宗教と政治の関連性研究	『リチャード三世』	歴史劇
34	出産イメージ研究	『夏の夜の夢』	喜劇
35	上演劇場研究	『十二夜』	喜劇
36	上演研究	『じゃじゃ馬ならし』	喜劇
37	上演研究	『ハムレット』	悲劇
38	上演研究+キャラクター研究	『リチャード3世』	歴史劇
39	上演史研究	『タイタス・アンドロニカス』	悲劇
40	初版本研究	『リア王』二つのテキスト	悲劇
41	書評研究	『恋の骨折り損』	喜劇
42	種本との比較研究	『冬物語』	ロマンス劇
43	種本比較研究	『十二夜』	喜劇
44	種本比較研究	『リチャード二世』『ヘンリー四世一部』 『ヘンリー四世二部』『ヘンリー五世』	歴史劇
45	種本比較研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
46	知的活動と生殖活動研究	『恋の骨折り損』	喜劇
47	ディスガイズ研究	『冬物語』	ロマンス劇
48	読者層研究	『ヴィーナスとアドウニス』	詩劇
49	版本研究	『ハムレット』	悲劇
50	版本比較研究	『リア王』 Quarto	悲劇
51	悲劇のずれ違い研究	『ロミオとジュリエット』『オセロウ』『リア王』	悲劇
52	フォーマリスト批評の批判	『ソネット』	詩
53	フォリオ書き込み研究	『ベニスの商人』『お気に召すまま』 『終わりよければすべてよし』『冬物語』	
54	舞台表象研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
55	翻訳と上演研究	『マクベス』	悲劇
56	メタファー研究	『尺には尺を』	問題劇

57	森の働き研究	『タイタス・アンドロニカス』	悲劇
58	呼びかけ語研究 (言語的研究)	『冬物語』	ロマンス劇
59	歴史記述の疑念検証	『ヘンリー六世・第三部』『リチャード三世』	歴史劇
60	歴史的研究	『ハムレット』	悲劇
61	歴史的研究	『ハムレット』	悲劇
62	歴史的研究	『マクベス』	悲劇
63	歴史的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
64	歴史的研究	『尺には尺を』	問題劇
65	歴史的研究	『ジョン王』	歴史劇
66	歴史的研究	『ヘンリー五世』	歴史劇
67	歴史的研究	『冬物語』	ロマンス劇
68	歴史的研究	『二人の血縁の貴公子』 シェイクスピア&フレッチャー共作	
69	歴史的研究	シェイクスピア全作品	
70	レトリック研究	『ルークリース』	詩劇
71	言語的比較研究	『ピーナスとアドゥニス』『ルークリース』 『愛人の嘆』	詩
72	作劇術研究	『尺には尺を』	問題劇
73	作劇術研究	『十二夜』	喜劇
74	作劇術研究	『シンベリン』	ロマンス劇
75	作劇術研究	シェイクスピア全作品と能作品や歌舞伎作品	
76	新歴史主義の限界	歴史劇	
77	比較文学研究+ジェンダー研究	複数の「テンベスト」	
78	比較文学研究	『テンベスト』	ロマンス劇
79	比較文学研究	『タイタス・アンドロニカス』 『ロミオとジュリエット』	悲劇
80	比較文学研究	『タイタス・アンドロニカス』 The Revenger' s Tragedy	悲劇
81	比較文学研究	『ハムレット』	悲劇

82	比較文学研究	『ハムレット』	悲劇
83	比較文学研究	『テンベスト』 Ben Jonson's The New Inn	ロマンス劇
84	比較文学研究	シェイクスピア全作品	
85	表象研究	『テンベスト』	ロマンス劇
86	翻訳を媒介とする作品解釈	シェイクスピア全作品	

研究方法で最も多い方法は歴史的研究が11回、キャラクター研究10回、言語的研究9回、比較文学研究8回、上演研究6回、種本比較研究4回、作劇術研究4回、原型研究2回、語り研究2回、その他である。その他の中には様々な研究があり、35番のフォリオ版に当時の所有者がどのような書き込みをしているかを調査したものや、52番悲劇のすれ違い研究をしたもの、さらには3番のガートルード姦通説研究等々である。

ここで研究発表に使われている研究手法を、個々のシェイクスピア作品で見えていくことにする。ジャンル別にして、どのような研究方法が使われているかを一覧表にした。

2.3.a. 喜劇の研究発表の場合

資料3

1	言語的研究	『ウィンザーの陽気な女房たち』	喜劇
2	原型研究	『ヴェローナの二紳士』	喜劇
3	言語的研究 + 異性装研究	『お気に召すまま』	喜劇
4	書評研究	『恋の骨折り損』	喜劇
5	上演研究	『じゃじゃ馬ならし』	喜劇
6	キャラクター研究	『ベニスの商人』	喜劇
7	言語的研究	『間違いの喜劇』	喜劇

8	言語的研究	『間違いの喜劇』	喜劇
9	出産イメージ研究	『夏の夜の夢』	喜劇
10	言語的研究	『空騒ぎ』	喜劇
11	コミュニケーション研究	『十二夜』	喜劇
12	上演劇場研究	『十二夜』	喜劇
13	種本比較研究	『十二夜』	喜劇
14	作劇術研究	『十二夜』	喜劇
15	知的活動と生殖活動研究	『恋の骨折り損』	喜劇
16	喜劇研究	『恋の骨折り損』	喜劇

資料 4

1	キャラクター研究	『尺には尺を』	問題劇
2	作劇術研究	『尺には尺を』	問題劇
3	メタファー研究	『尺には尺を』	問題劇
4	歴史的研究	『尺には尺を』	問題劇

まず資料3・4（喜劇:この中に問題劇を含める）から分かることは、『十二夜』のコミュニケーション研究、上演劇場研究、種本比較研究、作劇術研究である。『恋の骨折り損』は、知的活動と生殖活動研究、喜劇研究で、『間違いの喜劇』は二つとも言語的研究である。また資料3からは言語的研究が5回あることが分かる。取り上げられている作品は『ウィンザーの陽気な女房たち』、『お気に召すまま』、『間違いの喜劇』、『空騒ぎ』である。2番の原型研究の作品は『ヴェローナの二紳士』、5番の上演研究の作品は『じゃじゃ馬ならし』、6番のキャラクター研究の作品は『ベニスの商人』である。問題劇に喜劇を含めると『尺には尺を』の研究手法は、資料4からキャラクター研究、作劇術研究、メタファー研究、歴史的研究となっている。

喜劇作品ではキャラクター研究と歴史的研究が1回ずつあるものの、言語

的研究が5回と多く、この喜劇というジャンルでは、言語的研究が優勢である。

2.3.b. 悲劇の研究発表の場合

資料5

1	演劇意識研究	『アントニーとクレオパトラ』	悲劇
2	上演史研究	『タイタス・アンドロニカス』	悲劇
3	森の働き研究	『タイタス・アンドロニカス』	悲劇
4	比較文学研究	『タイタス・アンドロニカス』 『ロミオとジュリエット』	悲劇
5	比較文学研究	『タイタス・アンドロニカス』 The Revenger's Tragedy	悲劇
6	ガートルード姦通説研究	『ハムレット』	悲劇
7	キャラクター研究	『ハムレット』	悲劇
8	上演研究	『ハムレット』	悲劇
9	版本研究	『ハムレット』	悲劇
10	歴史的研究	『ハムレット』	悲劇
11	歴史的研究	『ハムレット』	悲劇
12	比較文学研究	『ハムレット』	悲劇
13	比較文学研究	『ハムレット』	悲劇
14	語り研究	『マクベス』	悲劇
15	翻訳と上演研究	『マクベス』	悲劇
16	歴史的研究	『マクベス』	悲劇
17	言語的研究	『リア王』	悲劇
18	版本比較研究	『リア王』 Quarto	悲劇
19	初版本研究	『リア王』 二つのテキスト	悲劇
20	キャラクター研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
21	キャラクター研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇

22	キャラクター研究+歴史的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
23	歴史的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
24	言語的研究	『ロミオとジュリエット』	悲劇
25	悲劇のすれ違い研究	『ロミオとジュリエット』『オセロウ』『リア王』	悲劇
26	言語的研究	『ロミオとジュリエット』 『夏の夜の夢』	悲劇 喜劇

資料5(悲劇)から読み取れることは、『ハムレット』の8回の研究発表では、ガートルード姦通説研究、キャラクター研究、上演研究、版本研究、歴史的研究2回、比較文学研究2回となっている。『ハムレット』に取り組む研究者の多様なアプローチが見てとれる。『ロミオとジュリエット』が単独で取り上げられている時は、キャラクター研究2回、キャラクター研究+歴史的研究、歴史的研究、言語的研究となっている。さらに複数作品で取り上げられている(25番、26番)場合は、悲劇のすれ違い研究と言語的研究がそれぞれ1回ずつである。『タイタス・アンドロニカス』の研究発表では上演史研究、森の働き研究、複数作品で取り上げられて(4番、5番)、比較文学研究2回となっている。『リア王』では言語的研究、版本比較研究、初版本研究となっている。

悲劇作品では歴史的研究5回、キャラクター研究4回、比較文学研究4回、言語的研究3回、版本研究3回、その他となっている。悲劇作品に対するアプローチの多様さを改めて実感する。

2.3.c. 歴史劇の研究発表の場合

資料6

1	歴史的研究	『ジョン王』	歴史劇
2	キャラクター研究	『ヘンリー八世』	歴史劇
3	歴史的研究	『ヘンリー五世』	歴史劇

4	言語的研究	『ヘンリー五世』	歴史劇
5	キャラクター比較研究	『ヘンリー六世・第一部』	歴史劇
6	歴史記述の疑念検証	『ヘンリー六世・第三部』 『リチャード三世』	歴史劇
7	上演研究+キャラクター研究	『リチャード三世』	歴史劇
8	宗教と政治の関連性研究	『リチャード三世』	歴史劇
9	サリカ法の象徴研究	『リチャード二世』『ヘンリー四世一部』 『ヘンリー四世二部』『ヘンリー五世』	歴史劇
10	種本比較研究	『リチャード二世』『ヘンリー四世一部』 『ヘンリー四世二部』『ヘンリー五世』	歴史劇

資料6（歴史劇）を見ると、『リチャード三世』は全10回の発表の内、3回発表されていて、歴史記述の疑念検証、上演研究+キャラクター研究、宗教と政治の関連性研究である。『ヘンリー五世』の2回の研究発表では、歴史的研究、言語的研究で、第一・四部作（『リチャード二世』『ヘンリー四世一部』『ヘンリー四世二部』『ヘンリー五世』）ではサリカ法の象徴研究、それに種本比較研究となっている。

他のジャンルに比べて、歴史劇研究では言語的研究での取り組みが少ない。歴史劇作品の特徴から上述の一覧表のような研究手法になるのであろう。

2.3.d. ロマンズ劇の研究発表の場合

資料7

1	作劇術研究	『シンペリン』	ロマンス劇
2	キャラクター研究	『テンペスト』	ロマンス劇
3	比較文学研究	『テンペスト』	ロマンス劇
4	表象研究	『テンペスト』	ロマンス劇
5	比較文学研究	『テンペスト』 Ben Jonson's The New Inn	ロマンス劇
6	時間研究	『冬物語』	ロマンス劇

7	種本比較研究	『冬物語』	ロマンス劇
8	ディスガイズ研究	『冬物語』	ロマンス劇
9	呼びかけ語研究 (言語的研究)	『冬物語』	ロマンス劇
10	歴史的研究	『冬物語』	ロマンス劇
11	キャラクター研究	『冬物語』	ロマンス劇
12	演劇的意味研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
13	語り研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
14	原型研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
15	種本比較研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇
16	舞台表象研究	『ペリクリーズ』	ロマンス劇

資料7 (ロマンス劇) から分かることは、前にも指摘したように作品数4といふ少なさにもかかわらず、研究発表数は多い。ここで取り上げる単独作品は『シンペリン』の作劇術研究の1回を別にすれば、他の作品は何度も取り上げられている。『テンペスト』は4回で、比較文学研究2回、キャラクター研究、表象研究となっている。『ペリクリーズ』は5回取り上げられ、演劇的意味研究、語り研究、原型研究、種本比較研究、舞台表象研究とバラエティに富んでいる。もう1作品『冬物語』は6回の発表を数え、時間研究、種本との比較研究、ディスガイズ研究、呼びかけ語研究(言語的研究)、歴史的研究、キャラクター研究である。あらゆるアプローチで『冬物語』が研究されていることが分かる。ロマンス劇の取り組み方は、キャラクター研究2回、種本比較研究2回、その他1回ずつということからも、特に研究方法に偏りは見られない。ということは逆にどんなアプローチも可能にするだけの魅力が作品を持っていると考えられる。作品の広がりや深さが研究者をロマンス劇に向かわせているのであろう。しかし作品の広がりや深さにおいては、四大悲劇はロマンス劇以上であると筆者は考えるが、その四大悲劇がそれほど、この10年間で取り上げら

れていない。いったいこの 10 年間で何が研究者をロマンス劇に向かわせているのだろうか。

3. まとめ

この研究ノートは過去 10 年間における日本シェイクスピア協会の研究発表を基に、シェイクスピア研究の手法を探ったものである。シェイクスピア研究では様々な研究手法が試みられている。そんな中この 10 年間に限って言えば、また研究発表の分析から言えば、研究手法に大きな変遷は見られないのではないかとということである。もちろん研究手法のなかには、マルクス主義研究や、ジェンダー研究、フェミニズム研究、ポストコロニアル研究など様々な研究手法が登場している。それらの手法で作品の解釈をしているが、最もよく使用される研究手法は歴史的研究であり、キャラクター研究であり、言語的研究であるといえる。これらの研究手法は研究発表数において上位に位置していることからそう判断できる。この傾向は 1980 年代や 1990 年代とそれほど大きく変わっていないのではないかと筆者は考える。

もちろん歴史的研究といっても E.M.W. ティリヤードを代表するような伝統的な歴史主義に基づく研究ではなく、スティーヴン・グリーンブラッドの実践しているような新歴史主義批評とよばれる手法であろう。伝統的な歴史観から取り残された、埋もれた文献などを掘り起こし、いわゆる正史（時の権力者が創造したもの）に疑問を投げかけ、そこから新たな解釈を生み出すという手法である。

またキャラクター研究もこれまた大きく変化している。この研究分野を代表する A.C. ブラッドレーは劇作品の登場人物を、実在の人物のように扱い、その人物の作品に見えていない部分まで、踏み込んでキャラクターを論じた。しかし 1990 年代に出てきたアラン・シンフィールドは、劇作品の中で登場人物が刻々と変化するのは、作品の時代背景の中で有力な多様な人物像を描き出し

ているというように考えている。このようなキャラクター研究から言えることは、劇作品の中の登場人物は実在する人物というより、劇作品の中だけに実在する人物として、その働きを考察の対象としている。

それから言語的研究手法についても 1930 年代のキャロライン・スパージョンのイメージリー研究や 1950 年代の M.M. マフードの言語遊戯から大きく変化している。例えばパトリシア・パーカーなどはシェイクスピア劇の台詞の中の言葉遊びを分析して、言葉遊びが当時の社会構造を暗示するものが含まれていて、そのことから社会階層や人種偏見など読み取れるとしている。

このように歴史的研究、キャラクター研究、言語的研究はその手法内容を大きく変えているが、研究手法という観点からいえば、まだまだ大きな流れの本流といえるのではないだろうか。

参考サイト

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/sh/>

<http://www.shakespeare2006.net/>

参考文献

A.C. Bradley, *Shakespearean Tragedy*, Macmillan, 1974

E.M.W. Tillyard, *Shakespeare's History Plays*, Chatto&Windus, 1944

Greenblatt, Stephen.J., *Shakespearean Negotiations*, University of California Press.,1990.

Mahood, M.M., *Shakespeare's Wordplay*, Methen, 1957

Parker, Patricia. *Shakespeare from the Margins: Language, Culture, Context*, Univ. of Chicago Pr, 1996 『周縁からのシェイクスピア - 言語・文化・コンテクスト』

Sinfield, Alan, ed., *Faultlines: Cultural Materialism and the Politics of Dissident Reading*, Oxford Univ. Press. 1992

Spurgeon, Caroline F.E., *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us.*, Cambridge U.P., 1935

*本稿は片平会夏期研究会（2006年8月6日・7日於奈良県）フォーラム「イギリス文学研究における現状と課題」の「シェイクスピア研究の現状と課題」を担当した際、口頭発表したものに加筆修正したものである。